

恋人はスナイパー <偽りと隠された真実>

作: ウッチャン大好きっ子

* <> で閉じられている会話は、中国語での会話になります。

☆新キャラ

今回はおりません。

☆解説Ⅰ (既に存在する言葉について)

特にありません。

☆解説Ⅱ (私が作ったオリジナルの言葉について)

1. 気功術・・・これは気を外部つまり外に気を直接放出する格好で相手に気をぶつける技術です。
例→”気功弾”、”気壁”
2. 気の変換・・・これは気を身体能力に還元する技術です。
つまり上とは異なり本来ある能力を高める為に気を使います。
足に気を集中すれば移動速度を上げられるというものです。
3. 舞輪曲 (ロンド)・・・蒼凱の槍術の技の一つです。
一人で舞を舞う様に回転しながら斬り、突き、払いなどを高速で繰り返す技です。
相手をその回転に巻き込む格好に持ち込むのでかなり相手には不利です。
4. 浸気術 (しんきじょつ)・・・これは気功術の一つです。
剣などの武器 (物) に自らの気を伝え、武器の強度、破壊力を高めたりする術です。
又は小石などに気を入れ投げる事でその場をしのぐ為の術。
熟年してくると対象物が無くとも直接手刀を武器の様にすることも出来ます。
ただ武器が気に耐えられずに碎けてしまう事が多いので、この術を使う者は
専用に鍛えられた武器を使います。
5. 発光石・・・特殊な石で様々な種類があり、様々なエネルギーに反応する物があります。
今回登場するのは”気”に反応し耐久性と蓄積力を持つ”気輝石” (ききせき) という石です。
これは上記にあります”浸気術”等の”気”に対応した武器に使われる事が多いです。
6. 気功刃・・・これは気功弾に似た物ですが、上記にあります浸気術の応用です。
剣に蓄積されている気をその形のまま撃ち出します。つまり刃の形のまま撃ち出すので
その気功刃は本物刃の様に切れ、かなり上級気功術であります。
7. 内気 (ないき) & 外気 (がいき)・・・これはどこから気を持ってくるかで分けれる分類です。
内気とは字の如く自分自身の体内から気を持ってくる事を指します。

外気とは周囲の空気の中にある気を使う事を指します。
気とは生き物が生きている生命力のようなものですので、余る事もあります。
または気を使う事の無い者はそれが不要なので体外に放出します。
それが空気中を流れています。それを使う方法です。
内気だけでも戦えますが、いつかは底を尽いてしまいます。
ですから、上級気功術師はこの二つの気を上手く織り交ぜて使います。

～第76章～＜襲撃＞

－鍛錬3日目－

きなこは日の出前に”武道場1”に来ていた。誰に起こされる事なく自ら、型の練習をしていた。

それをそっと見ている者がいた。それは天山だった。

天山はきなこが来る前にここで練習をしていたのである。誰かが来る気配に咄嗟に隠れてしまったのである。

『なんで隠れているんだろう…。これじゃあ出づらいしな～。』と天山は悩んでいた。

そんな中、きなこは部屋に自分以外に誰がいる事に気付いた。静かに身構え、周囲を見渡した。

『私の気配に気が付いたのか。意外と鍛錬の成果が出ているみたいだな。一つ試すか。』と天山は静かに仮面を外し何かを付けた。

そして不敵に笑った。

「元気だったか？俺の凱歌兄さんとはよろしくやってんのか？」と突然男が物陰から現れた。

その姿を見るや、きなこは驚くものの冷静に間合いを取った。

「范火清。どうしてここに…。」ときなこが問い掛ける。

「そんな事決まってるじゃないか。凱歌兄さんを連れ戻しに来たのさ！

だがその前に邪魔なあんたをやっておこうと思ってね。あんたがいるといつまで凱歌兄さんは帰ってこない。」と范は答えた。

二人は薄暗い室内で睨み合っていた。

その中できなこは心を落ち着け、冷静に考えていた。

『簡単にここには入れないはず。でも范はここに居る…。おかしい。もしかしてこれは…。』と

きなこが考えている間に范が先制攻撃をしかけた。

范の強烈な蹴りを両手で防ぎながら、范を隅々まで観察していた。

きなこは観察をある程度すると、攻撃に移った。

互いにぶつかり合った。その時、きなこは昨日天山から教わった事を試す事にした。

范と一定の距離を取ると意識を足に集中した。范はそれを隙と思い、ぶつかってきた。

きなこは目にも留まらぬ早さで背後に回り、意識の集中している右足で蹴りをぶち込んだ。

范は5、6 m もの距離と蹴り飛ばされた。范が苦痛にうめきながら立ち上がろうとした目の前にきなこが悠然と立った。

「范、いいえ天山さんこれはどういうつもりですか？」ときなこが少し不服そうに言った。

「天山？それは誰の事だ？俺は范火清だ！」と素早く立ち上がり攻撃を繰り返した。

きなこは冷静に范の腕を掴み、渾身の力で叩き付けた。

范はそのまま動かなくなった。きなこは范を調べ始めた。

「きなこさんどうしたんですか…。？范！どうしてここに？」と凱歌が現れた。

「ホイさん！どうしたの？なんでここに・・・。」ときなこが訊く。

「大きな音がしてそれで見に来たんだ。そしたら、きなこさんが居て。」と凱歌が言うと突然不気味な笑みを一瞬浮かべた。

きなこが安心して范の方を向いた瞬間、凱歌がきなこの背中に向かって蹴りを繰り出した。

それに気付く、素早くきなこは避けた。

「どうしたのホイさん？」ときなこが慌てて訊くと「いつまで夢見てるんだ？」と冷血ないつもの優しいホイではなく、スナイパー王凱歌の声が響いた。

その声にきなこは『いつものホイさんじゃない。それどころか別人みたい。』と感じた。

しかし、その考えをまとめる間の無く凱歌の俊敏な攻撃が襲ってくる。

「どうしたの？いつもの覇気がないね。今まであの仮面剣士から何を習ってきたの？」と馬鹿にするような声で凱歌はきなこに問い掛けた。

その言葉にきなこは意を決めた。『こいつはホイさんじゃない。ホイさんなわけが無い！』と。

きなこは先程より素早く足に集中し、凱歌に飛び蹴りを食らわせた。

しかし、先程の范とは異なり、足を捕まれてしまった。そして、思いっきり投げ飛ばされてしまった。

「その程度で俺が倒せると思ってなのか！やらないなら俺が君を倒すだけだ！」と凱歌は怒鳴り、胸よりやや下辺りに右手を上を、円を描く様に構えた。そして、ゆっくりと右の脇に両手を移動させた。

きなこはそれが何を指すか分からなかったが、凱歌の周囲に強い気の流れが起きているのを感じた。

『もし相手が気功術の使い手だとしたら、気を使う時は必ず気の流れが強弱はあるものの起きるはず。

それを感じたらすぐに気に対応出来る様にする事。気には気でしか攻撃も防ぐ事も出来ない。』

これは天山がきなこに教えた気功戦における基本の一つだった。

きなこは素早く両手に気を集中していたが未熟であり、相手の強すぎる気の流れに邪魔されていた。

「もう遅い！きなこさん、貴方は俺に勝てない！」と凱歌は集中させていた両手をきなこに向けた。

それは”気功弾”だった。”気功弾”は勢い良くきなこに向かってきた。

「ホイさん、私は負けられない！貴方と共に生きるんだから！」ときなこは両手を飛んでくる

”気功弾”に向けた。

凄まじい爆音が響いた。きなこが立っている目の前には薄暗い室内でありながら光り輝く盾が出来ていた。

その盾は未熟で歪ではあるが、しっかりと凱歌の”気功弾”を防いでいた。そして静かに消えた。

突然凱歌の笑い声が響いた。きなこはその笑い声に首を傾げた。

「やあ～、お見事。歪では有りますが見事に”気壁”を作り出しましたね。それに気を身体能力への変換も出来てましたね。

2日間の鍛錬は無駄じゃなかった様ですね。でも、まだ気持ちの高ぶりがないと作れない様ですがね。」と凱歌が話しながらきなこに向かってきた。その言い方は先生の様だった。

「どういう事、ホイさん！」ときなこが言うと、「まだ気が付かないんですか？しょうがないな～。

これでどうですか？」と凱歌が言うと凱歌の雰囲気が変わった。それは天山さんの感じだった。

「まさか！」ときなこが言うと凱歌が話した。

「そのまさかです。騙してしまって申し訳ありませんでしたが、試すには丁度良くてね。」といつもの天山の声で話した。

そして、静かに素顔が見えない様にマスクのような物を外し、仮面を付けた。

「でも、ここが薄暗くなかったらすぐにばれていたでしょうね。こんな未完成な変装じゃあ・・・。」と天山は

話しながら倒れている范を起こした。

「じゃあ范は？」と驚いてきなこが訊く。

「これですか？昨日準備しておいた范の”コピーロイド”だよ。咄嗟に使ったんです。

凱歌が一人ノコノコ現れるよりもいいと思って。でも、喋れないから私が喋っていたんですけどね……。」

と天山が答える。そんな中蒼凱が入って来た。

「何かと思えば、もう鍛錬を始めていたんですか？

でもそういう雰囲気とも思えませんが。あっ、”コピーロイド”！もう使ったんですか！？」と慌てて

”コピーロイド”に蒼凱は駆け寄った。

素早く工具を取り出し、点検を始めた。

「まだ調整が終わってないんですよ。

レベルだって”実際の范”と同じにしか設定してないんですから。」と蒼凱は天山に説教をしていた。

『”実際の范と同じ”？つまり私は范を倒せるって事？』ときなこは思いを巡らせていた。

「でも、実際といっても二人の話から基づいたレベルだろ？」と天山が言い、「そうですね……。」と蒼凱が答えた。

「とりあえずこれで使えます。あと、練習用のデータ作っておきましたから入れておきますよ。

それじゃあ僕は今日は凱歌の方に付く事になっているので、それじゃあ頑張ってください。」と言い

蒼凱が部屋を出ていった。

～第77章～＜師匠同志の争い＞

少し間が空いてからきなこが天山に訊いた。

「さっきの”コピーロイド”って実際の范と同じって言ってましたけどそれって今なら范を一人で倒せると言うことですか？それにどうしてこんな事したんですか？」ときなこは問い掛けた。

「確かにこの”コピーロイド”はきなこさんと凱歌の話などから推測されるレベルで作られている。

もしこのレベルがあってれば今のきなこさんなら一人で倒す事が出来ますが、相手も鍛錬を怠らないでしょう。

どうしてこんな事をしたかという、きなこさんがどれだけ気を理解しているかを試したかったんです。

鍛錬中でも良かったのですが、いかに気を素早く安定させ、変換が出来るかを見るのは突然が一番です。

悪いとは思ったのですが戦闘中は何でも突然ですから……。許して下さい。」と天山は終始謝っていた。

「いいですよ。それじゃあ少し早いですけど鍛錬始めましょうよ。」ときなこは言う。

そして、朝一の鍛錬が始まった。

朝食の時間となり、きなこ天山は食堂で食事を済ませた。またしても凱歌達とすれ違いだった。

しかし、きなこは凹む事も無く鍛錬をやっていた。

その姿勢に天山はきなこの強さを感じていた。

そして天山が龍冴と対等に戦える様に作った取っておきの大技をきなこに教える事にした。

きなこはその事を聴いて更に鍛錬に集中した。

そんな中、時々爆音のような音が遠くから聞こえてきていた。

天山はその音を聴くや、目を細めた。

『これは間違い無く”気功弾”の爆音…。それに何なんだこのとんでもない気の大きさは…。

プロフェッサー、凱歌に何を教える気だ…。

あんまりとんでもない物を教えられると困る。私は変換は得意でも気功術は得意じゃない…。このままだとみなさんと凱歌の差がなくなるな～。少し急ぐか…。』と天山はやや焦っていた。

午後になりきなこはやっと龍冴用意してくれて”太極剣”を使う事を許してくれた。

やはり木剣とは違い、手にしっかり馴染んでいた。

この頃にはきなこは”気の変換”が意志をその部分に集中せずとも出来る様になっていた。

その飲み込みの早さには天山は驚いた。本当に太極拳を4日間でマスターするかもしれないと考えていた。徐々に高度な技術をきなこは身に付けていった。

そして3日目が終わった。

ーきなこの部屋ー

今日も凱歌と逢えなかったきなこは一人部屋でボーっとしていた。

こういうときに会いに行けばいいのだがなぜか踏ん切りが付かなかった。

どこかでライバルのような感じで、練習中は逢いたくないような気がした。

そんなこんな訳の分からない葛藤にきなこは苦しんでいた。

しかし、それは凱歌も同じだった。きなこと同じ様な事を考えて苦しんでいた。

ーミーティングルームー

こんな二人を知ってか知らずか、二人の師匠と言うか先生であるプロフェッサーと天山が真剣に話合っていた。

「プロフェッサーは一体どんな事を凱歌に教えている？」と天山が訊く。

「それは気功術じゃよ。それなら天山は何を教える？」とプロフェッサーは訊き返す。

「それは…。」と両者共に手の内を明かさなかった。

そんな師匠の意地の張り合いを蒼凱は両者に関わる者として面白おかしく見ていた。

そしてその中で凱歌ときなこを鍛練の成果を見るという事で戦わせる事になった。

それは明日つまり4日目の最後に行なう事になった。それも直前まで教えないという事になった。

それを決めるとそそくさと二人とも部屋を出ていった。

「全く二人とも本当に師匠みたいになっちゃって…。」

凱歌ときなこさんは大変な事に巻き込まれたかもしれないな～。

でも、まだ龍冴さんという最強の刺客が、二人に付いた事がないというのに…。

さて、僕も明日の準備をするか…。」と蒼凱は独り言を言うとコンピュータに向かった。

～第78章～<天才の後ろに隠れた強者>

ー4日目ー

プロフェッサーと天山の真剣試合の話を聞かされる事無く、朝5時から両者の鍛錬が始まった。

きなこは朝から妙に飛ばす天山に疑問を感じていたが、今日が第一鍛錬の最終日だからだと考えた。

基本的な準備を終えると、天山との簡単な組み手を行なった。

その後は武器を手にした気功術師との戦闘方法を教えられた。

蒼凱はその鍛錬内容に凱歌との戦いを視野に入れた内容に気付き、呆れてしまった。
『弟子を使つての意地の張り合いじゃないか……。』
でもそれくらい二人とも強いんだな〜。僕も真剣にやらないまずいな……。』と蒼凱が思っているときなこ
と武器戦を行なう事になった。
とはいえ、蒼凱はある程度の加減を要求されている。
その難しさは相手であるきなこが気の変換を使える点からして面倒である。
スピード、破壊力などの能力が変わるので合わせづらいのである。
でもそこは槍使いとしては相当の腕の有る蒼凱である冷静に事を見定める才と技術でカバーする事に
した。

両者共に静かに練習用の武器を手にし、向き合った。
きなこは初めてだった。
槍というか長物を使う相手と戦うのは練習では簡単な打ち合い程度はしていたが技などを見た事が
無かった。
そして、蒼凱が武器を手にして戦うのを見るのは初めてに等しかった。
『僕は四人の内では非戦闘員という感じがありますが、結構強いですね。
槍を持つとますますね。だから真剣にこないと痛い目に合います。』と蒼凱は笑顔で言うと
凱歌同様に目つきががらりと変わった。
そして静かに矛先をきなこに向けた。
蒼凱が持つ槍の長さは全長2 m 20 cm。それに蒼凱の190 cmの身長が加算される。
とてつもないリーチの長さになる。しかし、リーチが長いと接近戦に持ち込まれると不利になるもので
ある。きなこはとにかく接近戦に持ち込む事を考えていた。
『お先にどうぞ。接近戦でもなんでも来てみて下さい。』と蒼凱はその眼鏡の奥に見える冷眼を
きなこに向けながら挑発的に言った。
『じゃあ行かせてもらいます！』ときなこは言うのと腰に付けた”太極剣”を抜き去り走り込んだ。
蒼凱は冷静にその動きを目で追い、斬り込んでくる剣を矛先とは反対の飾りが付く柄で押さえ、
槍を回転させて剣を払いのけた。
その回転の勢いできなこはバランスが不安定になったその瞬間蒼凱の目の色が変わった。
飾りが付く柄をきなこの胸に目掛け突き立てた。
きなこは咄嗟に剣で防いだが、それはフェイクだった。槍を短く持ち、刃できなこの両足を切り裂いた。
研がれていない為、実際には切れないがその衝撃は傷跡が実際に出来た様に痛みを残す物だった。
きなこの動きを完全に読み、更には動作をコントロールされている事にきなこは動じた。
『確かに槍はリーチが長く、接近戦では不利になる事が多い。
ですが、熟練してくるとその考えを逆手に取る事が多いんです。
ですから、僕にとって接近戦は不利どころか有利です。真剣にやって下さいね。
まだ僕は一つも技のような物を出してませんよ。ただ槍を振っただけです。
さっきまでの鍛錬は何だったんですか？』と今までの楽天家の蒼凱が偽りのような冷血な
言い方だった。
きなこはこのままでは勝つどころか、まともに相手にならないと思った。
意を決めきなこは戦い方を変えた。”気の変換”をフルに使う事にした。

そして、きなこは高速スピードで蒼凱に向かって行った。

蒼凱は目を閉じ、きなこの攻撃を的確にそして無駄の無い動きを払っていた。

そして、きなこが高速で突きを繰り出した。しかし、まるで剣先が次どこに来るか知っている様に軽々と避ける。

「遊んでいるんですか？」ときなこの背後に突然現れ囁いた。

きなこは動揺し剣を振るったが、そこにはもういなかった。

天山はそのあまりにも力の差が有り過ぎる事に苦汁を舐めたような表情を浮かべた。

『これほどまで差があるか…』

蒼凱も手加減というものと知らないのか…。

とはいえあれでもかなり遊んでいる方か…。このままでは蒼凱に切り刻まれる。』と天山は心の中で呟いた。

「きなこさん！自分がもっとも優れている所を遺憾無く発揮して下さい。

でなければ、蒼凱と対等に戦う事も出来ません！」と天山は言った。

「そんなこと言っても。」ときなこが答えている間にも蒼凱は攻撃を緩めなかった。

その時、きなこは自分を切り裂こうとする連続攻撃を”水が流れるようなしなやかな動き”で避けた。

天山と蒼凱は同時に同じ事を考えていた。

『その動きこそがきなこさんの最大のポイントです。お願いだから気が付いて下さい！』と。

蒼凱は段々手加減の度合いが分からなくなって来ていた。

いつもは手加減をされる方だからである。咄嗟に本気で攻撃してしまいそうになるのを必死に押さえていた。

そしてきなこも段々天山が言う”優れている所”が分かってきた。

遂にきなこはその流れるような動きを使い蒼凱を翻弄し始めた。

蒼凱は笑みを浮かべると攻撃パターンを変えた。

先程まではその”流れるような動き”を分からせる為にわざとそうなる様に持ち込んでいた。

しかし、その必要がなくなり、ましてや、きなこの攻撃を防がなくてはならなくなったので、本格的に戦闘態勢に入った。

蒼凱のその長い槍を使っているのは思えない流れるような硬さ、継ぎ接ぎの無い攻撃を繰り出してきた。きなこはそれを上手く回避しながら蒼凱に刃を向けた。

「一つ僕の槍術をお見せしましょう！”舞輪曲”！」と蒼凱が言う。と槍を頭を上に構え体を回転した。

まるで曲に乗せて舞う様に斬り、突き、払いなどを高速で繰り出してきた。

きなこはその舞いに巻き込まれる格好で攻撃を防ごうとするが、全く刃に立たず攻撃を食らってしまった。そして弾き飛ばされてしまった。

蒼凱は槍を振り切ると背後に気配を感じ槍を防いだ。

きなこが素早く蒼凱の背後に回り、斬りかかっていた。

明らかにきなこの動きが変化していた。それは蒼凱を驚かせるものだった。

『やっぱり侮れない。この人は見る度に強くなっていく。油断したらやられる。』と蒼凱を動揺させた。

それからは蒼凱も手加減の度合いを緩め、真剣にぶつかり合った。

数分激しく打ち合っていたが、やはり武器戦慣れしている蒼凱がきなこの剣を弾き、穂先を首元に突き付けた。そして、ゆっくりと穂先を降ろした。

蒼凱が油断をしなければ、もっと早く決着が着いていたし、動揺する事も無かった。
そして、怪我をする事も無かった。実は蒼凱は本気できなこの強烈な一撃を左腕に受けていた。
しかしそれを隠しながら戦っていたが、徐々に痛みが本格的なものになっていたので危険と判断した。
そして仕方無く、加減を無くし、本気で打ち込んでの勝利だった。
きなこに手を差し伸べ起こすと蒼凱は口を開いた。
「しかし凄いですね。もし武器戦の経験がもっとあったら、僕は危なかった。
もっと練習を積んだら僕程度だと相手にならなくなるかもしれませんよ。」と蒼凱は言った。
「そんなお世辞はいいです。」と負けた事に少しご機嫌斜めのきなこが答えた。
『お世辞抜きで下手をすると本当に危なくなります。もう少し本気で鍛錬を積み直さないともずい……。』
と蒼凱は心で思いつつその不安を顔には出さず居た。
蒼凱ときなこが互いの健闘を称えあっていると天山が時計を見て口を開いた。
「そろそろ約束の時間ですね。
きなこさん、これからある方と真剣勝負をして頂きます。
その相手が誰であろうと本気で戦って頂きます。
これはこの4日間の成果を試すものです。
よろしいですか？」と天山は真剣な表情で言った。
きなこは突然の試合の話とその天山の真剣な表情に驚きつつ、静かに頷いた。
蒼凱はその姿を見ながら、これから行なう試合を思うと少し悲しくなった。
そして天山はきなこを連れ移動を始めた。
蒼凱は傷の手当ての為に先に医務室に行く事にした。

～第79章～＜成長＞

－武道場2－

凱歌の夜叉事件で荒れていたが、この2日間に修繕が行われ以前よりも綺麗になっていた。
そして天山に連れられ室内に入ったきなこはその以前とは全く違う完璧な修繕が行なわれた
室内に驚いた。
「まだ来てない様ですね……。少し待っていれば来ると思うので座ってまじょうか。」と天山は入って
右手の壁側にきなこを案内し座った。

－医務室－

蒼凱はきなこから受けた傷が思っていた以上に酷かった事に見るまで気が付かなかった。
左腕は鬱血して腐った肉のような色に変色しかけていた。
自分自身でも『これは……。』と思っている時だった誰かが入ってきた。
慌てて振り返るとそこには龍冴が立っていた。
「随分と痛々しい怪我をしたものだな～。
お前らしくないというかどっちにやられた？」と少し楽しそうに龍冴は蒼凱の座る椅子の隣に
椅子を運び訊いた。
「そんな楽しそうに言わないで下さいよ。
確かに油断していたのは事実ですけど……。
これはきなこさんとの武器戦でやったんです。」と蒼凱は少し楽しそうに言う龍冴にムカッとしながら

答えた。

「ほお〜。きなこさんにやられたか。

やっぱり土壇場で強いのは女かな・・・。」と言いながら龍冴はテキパキと蒼凱の手当てを行っていた。その顔はとても嬉しそうだった。

「龍冴さんはこれから行なわれる試合、見に行くんですか？」と蒼凱は包帯の巻かれた左腕を確認しながら訊いた。

「試合？もしかして凱歌ときなこさんに武器戦という真剣勝負をさせるのか？」と使った薬をしまいながら龍冴は訊き返した。

「知らなかったんですか！？」

僕ははっきり知っていると思って。二人の為にここに来たと思ってました。」と蒼凱が驚いて言った。

「俺は単に医薬品を取りに来ただけだ。

そうだな。二人の為に薬を用意した方がいいな。

しかし、これは二人の鍛練の成果を見せる戦いである前に、師匠同士の意地のぶつかり合いになりそうだな。

これは見ないともったいないな！さっさと見に行こうか！」と龍冴は手早く医薬品をまとめると蒼凱の手を取り、子供の様に走り出した。

「そんなに急がなくても開始予定の時間まで時間ありますから〜！」という蒼凱を、龍冴は聞く耳持たず引っ張って行った。

ー 武道場2 ー

きなこ達が着いてから3分ほどして扉の前が騒がしくなった。

そして突然扉が開け放たれた。

そこには笑顔で荷物を抱えた龍冴と無理矢理手引っ張られ疲れて肩で息をする蒼凱が居た。

「良かった。まだ始まっていなかった様だな。きなこさん、元気だったか？

しかしこんな面白いもんやるなら言ってくれよ天山！」と龍冴は言った。

「楽しい事って・・・。

そう言い方は良くないですよ。これからある戦いは真剣勝負なんですよ！」と天山はその龍冴の態度に怒った。

「でも、この二人の戦いはここにいる奴なら見たいに決まってるだろうが！

なんで教えなかった！」と龍冴は怒鳴った。

「教えようと思っても龍冴はずっと連絡付かなかったじゃないですか！」と天山も負けずに怒鳴った。

そんな二人を蒼凱が宥めていると再び扉が開いた。

全員が振り返るとそこにはプロフェッサーとその後ろに凱歌が立っていた。

「やっと役者が揃ったか。久しぶりだな凱歌。

随分と二人とも頼もしくなって、これは楽しみだ。」と龍冴は言うのと道を明けた。

プロフェッサーは黙ったまま静かに入って左側の壁側に座った。

何も聞かされていないきなこ凱歌はお互いに久しぶりに逢う相手の変化を敏感に感じ取っていた。

両者が向き合う格好で座るのを確認すると蒼凱と龍冴は両者の間に立ち、耳打ちをした。

そして龍冴が口を開いた。

「これからプロフェッサーと天山、両者の教え子である王凱歌と円道寺きなこの両者に、この4日間の鍛錬の成果を見せてもらう為に、これより武器使用、気の使用の真剣試合を行なってもらおう。

なお、これはあくまでも試合である以上、危険と判断した場合は俺達二人が止めに入る。しかし原則としてどちらかが気を失うか、負けと判断される状況になるまで試合は続ける。

武器は俺が用意した練習用の武器を使用する事。それ以外は使用禁止とする。
気については使用を認める。

プロフェッサーと天山は手助けをしてはならない。もちろん助言も禁止とする。

怪我の事は心配なくていい。治療ならあつという間に済んでしまうからな。

両者とも試合について、分かってもらえたかな？」と龍冴が言った。

凱歌ときなこはやっと状況が把握出来た。

プロフェッサーと天山の両者は二人に内緒でこの試合をセッティングし、厳しい練習をさせたのだ。
「凱歌ときなこさんのお二人は把握出来た様ですね。

一応4日前は僕達四人の見解としてはきなこさんが少し勝ってました。

それがどうなったか。またどれだけ強くなったか見させて頂きます。」と蒼凱が丁寧に言った。

「俺は二人の鍛錬に一切関わっていないからどんな事を身に付けたかも、どれだけ強くなったかも知らない。

だから真剣に全力をぶつけ合ってくれないと二人は何にも身に付けてないと思うからそのつもりで。」と龍冴はいつに無く真剣な眼差しで二人を見た。

そして二人が立ち上がり、龍冴を挟んで1 m ほどの間を空けて立った。

「試合を始める前に、二人の武器を確認させてもらう。互いに鞘から抜きなさい。」と言い龍冴は凱歌から順に武器を手に取り刃を確認した。

確認している内に龍冴は目を細めたもののそれぞれに武器を返すと、プロフェッサーと天山を睨んだ。
「お前ら…。随分とずさんな鍛錬してたみたいだな。

何だこの武器の状態は！これで鍛錬をしたというつもりか！」と龍冴は怒鳴った。

凱歌ときなこは龍冴が怒る理由が分からなかった。

しかし、蒼凱にはその理由が分かった。

それは二人の武器の状態があまりにも綺麗過ぎる事のである。

刃に剣と剣のぶつかった時に出来る小さな傷がちらほらある程度だったからである。

「武器の状態をいうのなら、それは凱歌は上手いのじゃよ。

しかし、鍛錬は確かに厳しくした。」とプロフェッサーが答えた。

「私も同じくだ。相当鍛えましたよ。

武器の傷だけでは判断出来ないと思いますよ。」と天山も答えた。

「ほお～。武器の傷に比例しないと言うか…。これはますます楽みな事だ。」と言うと龍冴と蒼凱は二人から離れた。

～第80章～＜真剣試合＞

「それでは始めようか。両者、全力を尽くす様に。それではいいかな？」と龍冴が訊くと二人は頷いた。
それを確認すると「開始！」と声を上げた。

二人は龍冴の掛け声に合わせて互いに距離を置いた。

そしてきなこは静かに剣を鞘から抜き、凱歌の頭上に剣先を向ける格好で片手で構えた。

凱歌は左右の腰に付く”詠春刀”の柄に手を静かに掛けるが引き抜かなかった。

ただそれは通常の剣の構えとは逆の小指側に刀身が来る格好だった。

両者は互いに様子を見合っていた。

それは正しい選択だった。なぜなら今の両者は前とは比べ物にならないほど技術も力も増している。

何を身に付けているか知らない。つまり何が入っているか分からないビックリ箱のような物である。

その動かない両者にこの4日間の鍛錬が真面目なものだった事を龍牙に分からせた。

しばらくするとその止まってしまった流れが動き始めた。

動きを起こしたのはきなこだった。

きなこは気を集中させ始めた。それは徐々に剣に伝わっていた。

『ほお〜。”浸気術”を教えたか…。それで武器の傷では判断できないか…。』と龍牙は思う。

そしてある程度気が剣に伝わると凱歌に向かっていった。

凱歌はきなこの流れるような剣術を避けながら探っていた。

攻撃されてもお凱歌は剣を抜かなかった。

きなこの攻撃を飛び避けるとやっと剣を静かに抜き去った。それは逆手の構え(先程の柄に手を掛けていた時の格好)だった。

向かって来るきなこの剣を軽々と弾いていく。それはその武器の名の様に蝶が舞う様だった。

しかし、気には気でしか戦えないというのは現実である。

いくら上手く弾いたとしてもきなこの剣には気が籠もっている為、武器自身にはかなりの負担が懸かっている。

凱歌は素早くきなこの剣を弾きながら”浸気術”を自らの武器にも施した。

その完成度は、きなことは異なるぶつかっている最中に術を施した事に龍牙は舌を巻いた。

『”浸気術”は凱歌の方が優れている。

しかしこの程度しか気を込める事を教えていない様だな…。

それも当然か…。これは専用の武器ではないと思っているからな。』と龍牙は思うと声を上げた。

「二人とも武器に気を本気で込めろ！武器を信じるのだ！

替えなら用意してあるから心配は要らない。それに…。何でも無い。やってみろ！」と言うと龍牙は二人の替えの武器を床に刺した。

二人はその言葉の真意が分からなかったが、試す事にした。

一旦離れた二人は気を改めて先ほど以上に込めていった。

すると刀身が淡く光り始めた。その輝きは美しく優しい物だった。

そしてそれぞれ異なる色を放っていた。凱歌は黄色を、きなこは青いの光を放っていた。

『”浸気術”を教えると思って専用の武器を用立てたんだ。

そしてその証拠に気に反応する”発光石”の一つ”気輝石”という石が刀身に混ぜられている。

これで全力で戦えるはずだ。さあ〜！成果を見せてもらうか！」と龍牙は腕組みをして言った。

凱歌は”詠春刀”を持ち替え、きなこに先制攻撃を掛けた。

きなこもそれを”太極剣”で防ぎつつも蹴りや空いている左手で攻撃をしてきた。

激しい打ち合いの中で凱歌は刀身に溜まっていた気を撃ち出した。

きなこは慌てて剣で防いだが、その衝撃はきなこを弾き飛ばすものだった。

『あれは明らかに”気功刃”…。そうかプロフェッサーめ、凱歌に難度の高い上級気功術を教えたな。

きなこさんが”浸気術”を使えるから今のは防げたが連続で出されてたら不利だ。

さあ、これをどう乗り越えるかな、変換使いのきなこさん。』と龍冴は様子を見ていた。

きなこは凱歌の行った事を冷静に理解していた。

それに対処方法も天山から教えられていた。

きなこは目を閉じ更に剣にそして足と両手に気を込めた。

凱歌は両手の刀を握り直すと素早く振り回した。僅かに間を置き、凱歌がきなこに向かっていった。一見見ると素振りをする様に見えるが、気を使う者には凱歌の刀から”気功刃”が放たれているのが感じられた。

凱歌から”気功刃”が放たれたのを感じる時きなこは目を開け、その見えない刃を両手でしっかりと握った”太極剣”で叩き落していった。

きなこは”浸気術”の濃度を高めると同時に、気の変換により両手の力と四肢の反応スピードを高めていた。凱歌は冷静にきなこに斬りかかった。

しかし、反応スピードが上がっているきなこに凱歌の攻撃は遅いとしか感じなかった。

不利と感じた凱歌は右手の刀を鞘にしまうと右手をきなこに向けた。

きなこは身構える間も無く、気が付くと壁に叩き付けられていた。

『あれは単に気を一定方向に放出しただけ…。また随分と初歩的だが上手く利用している。』と龍冴はやや凱歌に感心していた。

きなこは素早く凱歌の後ろに回り剣を振るった。

しかし、凱歌は防ぐ事無く立ち尽くしていた。

きなこが『えっ！？』と動じたがその理由はすぐに分かった。

凱歌は”気壁”を張っていたのである。それによりきなこの剣は大きな音を立てるも凱歌に触れられず空中で防がれていた。

離れるときなこは凱歌の気の量に驚いていた。しかしそれは龍冴と天山も同じだったが、違う事も考えていた。

『このまま進めば凱歌の勝ちが決まりだ。だが二人とも”内気”しか使えないようだな…。

これでは倒れるのがオチだ…。気が付くか試すか…。』と龍冴は思うと腕組みを外し、両手を後ろに回すと指を広げ目を閉じた。

天山とプロフェッサーは室内の気の変化に敏感に反応した。

『気の流れが変わった。』と思うや二人とも龍冴を見た。

二人とも龍冴がしようとしている事が分かった瞬間、互いに意を決め、気を放出し始めた。

それにより凱歌ときなこも室内の変化に気が付いた。

室内に感じる気が濃厚になっていた。

「二人とも室内の状態を変えた。それを上手く使ってみろ！」と龍冴は目を開け言った。

『あんなに助言はダメだと言ったのに龍冴さんが助言しちゃったよ…。』と蒼凱は思い、溜息をついた。

二人は何の事が分からなかったが、きなこは今の状態を脱する何か方法があるのだと踏んだ。

凱歌は冷静に周囲の気の流れを見ていた。

その時、コーの気功を使う前の姿がよぎった。

凱歌が『まさか！？』と気付かかけた時、きなこが突っ込んで来た。

慌てず”気壁”を張るが、きなこの剣はそれを切り裂いた。

凱歌は慌てて左手でさなこの剣を防ぐがその刀身はいつに無く輝いていた。それは眩しいほどに。
『凱歌も気付いたが、それより早く利用したのはさなこさんだったか…。』

やはり適応力はさなこさんの方が上だな。これで”外気”はいいな。
でもさなこさん、頭で考えるよりも体が動いたような…。』と龍牙が思っている事が正しかった。
さなこは周囲の気を使う事を頭で理解するよりも体が反応したのが先だった。

突然力が増した事にさなこ自身が驚いている状態だった。
『頭で考えるよりも先に反応したのはこの異常に高い濃度のせいです。
でもこれでさなこさんに僅かに勝ち目が出たかもしれませんね。』と天山は思ったがそうは
いかなかった。

凱歌は右手に剣を持ち、走り込んだ。
激しい剣と剣のぶつかり合いが続いた。
さなこは気の変換で敏捷性、反応スピードを上げていたが、凱歌の方がそれを上回っていた。
凱歌は気功術と含めながらさなこに迫っていた。

そして、凄まじい音が響いた。
そこにはさなこの剣を弾き飛ばし、さなこに剣を突き付ける凱歌としゃがむ、さなこがいた。
龍牙が「そこまで。」と言うと、弾かれた”太極剣”が床に刺さった。

～第81章～＜計らい＞

しゃがむ、さなこを凱歌が起こすと互いに武器を鞘にしまい礼をした。
「二人とも随分と強くなったじゃないか。
4日間でこれだけ強くなれると。
しかしプロフェッサー、天山！お前ら重要な事を教えないとは何事だ！」と龍牙は怒鳴った。
プロフェッサーと天山の両者は固まってしまった。
「特にプロフェッサー…。お前は凱歌を殺す気か。
あれだけの特技を使って倒れないのは、凱歌が驚異的な気の量を持っていたからだぞ。
”内気”も”外気”も教えないとはどういうつもりだ！」と龍牙は怒鳴り右手をかざした。
プロフェッサーは慌てて撃ち出されて気功弾を避けた。
「待て待て！話を聞け！」とプロフェッサーが言うが、「問答無用！」と龍牙がその場にあった”太極剣”
の手にした。
刀身が赤々と輝き出し「食らえ～！」と龍牙はプロフェッサーに向かい剣を振るった。
剣から”気功刃”が飛び出した。それは凱歌とは比べ物にならないほど強力な物だった。
プロフェッサーは振り返り”気壁”を張った。しかし壁に叩き付けた。
全員の威力に絶句した。プロフェッサーが張った”気壁”外の場所には大きな切り傷が壁に残っていた。
そして、強大な気を込められた事で練習用の”太極剣”が耐えられずに音も立てずに砕け散った。
あまりにも壮絶な戦いに凱歌とさなこは固まるばかりだった。
「二人とも気を最大限に発揮すればこれくらいの事も出来るようになります。
もちろん、”内気”のみでは無理だけどね。無理をして行なえば気を失ってしまいます。
そこで足りない分や負担を補う為に先程使った周囲の気、”外気”を使います。
ですから、気功術師という気を使う者は常識として使い分けが出来る様になってないといけないんです。
それをこの二人は怠り、強さのみを追及した。全く何を考えているやら！」と龍牙は凱歌達に向くと

言った。凱歌ときなこは龍冴の足元に散る”太極剣”がまだ赤く輝いているのに気付いた。

「とりあえず、二人とも”内気”と”外気”の違い。それに使い方も分かったな。

たださっきのは俺達が気を放出する事で室内の気の濃度を高めたからこそ出来たという事を覚えておく事。

それにこれは練習用の武器だから耐えられる気の量も少ない。

「実戦用の武器は俺が全”内気”に更に相当の”外気”を込めても砕けない最上級の物を用意するから心配するな。」と龍冴は笑顔で言った。

蒼凱はプロフェッサーを支えてやってきた。

「さて、予想していた以上に成長していたんで、少し予定を変更する。

明日は1日、二人とも休みとする。

ずっと鍛錬漬けだったし、気は心と深く関わっている。気晴らしは必要だ。

「ここから出て、外で過ごすといい。というか、実はプロフェッサー達三人に手伝ってもらいたい事があるんでな。」と龍冴は改めて言った。

しかしこれは前もって予定に組まれていた四天王からのご褒美のようなものだった。

二人を巻き込み、利用してしまう事への罪滅ぼしのようなものでもあった。

二人は「えっ!」と驚いてしまった。

「でも…。こんな事をしている時間なんて。」と凱歌が言うと龍冴が分が悪そうに頭を掻きながら言った。

「そう言うな…。確かに急ぎたい所だが、情報も足りないし警視庁内のスパイも見つからない。

こんな状態ではどうにもない。それに急がば回れと言うだろ？

それでだが、外に出るのは構わないが凱歌には天山の手で本格的な変装をしてもらう。

それに市江さんにも会ってくるといい、ちゃんと連絡も取ってある。」と龍冴が続きを話そうとすると凱歌が言ってきた。

「母さんに会っていいんですか!」と慌て気味に凱歌が言う。

「ああ…。ただ午前中は検査があるから午後からならいいという報告だ。

俺の部下が警備に常についているから誰かが入って来る心配もない。変装を解いてもいいぞ。

夜はきなこさんの家に泊めてもらうといい。雁太郎様から言われてたからな。

翌日に俺が紅龍に迎えに行く。それでいいかな?」と龍冴は言った。

二人は納得した様で顔を見合うと嬉しそうに笑った。

「そう言えば何か用意して欲しい物はあるか？

折角お見舞いに行くなら花ぐらいいるだろう? 特定の花が欲しいなら用意するぞ。」と龍冴が訊く。

「あおう、”忍冬”という花を…。母さんが好きな花なんです。」と凱歌が遠慮気味に言った。

「ああ、忍ぶ冬と書く綺麗な花だよな。あれは普通の花屋じゃ手に入りづらい花だな～。

分かった出発までに用意しておくよ。」と龍冴が何かを思い出しながら言った。

「龍冴さんが知っている花なんて珍しいですね。」と蒼凱が驚いて言った。

「”忍冬”は、色々と思い出があつてな…。色々とな…。」と龍冴は意味深な表情で言った。

全員不思議そうに首を傾げたがそれ以上訊けない感じだった。

久しぶりの宴会のような全員での騒がしい夕食を取った。

そして夜が更けていきお開きになった。

酔いつぶれたプロフェッサーを蒼凱に任せ、龍冴と天山は”忍冬”の調達をする事にした。

凱歌はきなこを部屋まで運ぶと自室に戻りベットに入った。

しかし明日の事を考えると眠れなかった。

こうして鍛錬4日目が過ぎていった…。

ー続く

<あとがき？>

今回もゆっくりで長々とした本作を読んで頂いてありがとうございました。

今回は通常のあとがきのものと今まで語らなかった<劇場版>への思いを書かせて頂きました。

本当は<劇場版>については掲示板に書くべきなのですが…。

皆さんと語るほどの中身も無いと思っているので書いていませんでした。

ですが今回は一方的な書き方で語りたいと思います。

この思いについては感想を書いて頂く時にでも一言的に触れて頂けると幸いです。

☆あとがき☆

今回のお話の中で<劇場版>を思わせる部分があります。

それははっきりと言います！<劇場版>を思って書きました。

でも、分かって頂きたい！

忍冬はどうしても登場して欲しかったので出しました。

不快に思われた方には申し訳ありません。

☆『劇場版』に対する思いと私なりの考え☆

『愛する者の為に命を張る・死ぬ』

これは響きこそいいが、残される方がたまったものではない。

残された方は、一生その相手の事を忘れられないし、それどころかその呪縛から逃れられなくなる。

増してや止められた可能性があったのなら、なおさらの事である。

もちろん私は愛する人が自分の為に命を張るという凄まじい経験は無いし、身近な人の死も経験した事が無いような奴です。

ですが、やっぱり想像するだけでも胸が張り裂けそうになります。

凱歌ときなこの間にはこのような繋がりは残って欲しくない…。

ズバリ言います！私は、とことんひねくれ者である。

『あの場では死んでない。きっとあのラストの草原を歩くシーンは事件後元気にホイの故郷を二人で散策してるのだ。』と思う事にします。

ですが、やっぱり涙が…。(TT)

本物の方の色々な謎はDVDの特典で明かしてもらわないと…。でないと死んでも死にきれない！

ですから、この作品では今構想を練っている所ですが、個々に”選んでもらおう”と思っています。

その意味についてはお楽しみに♪

まぁ〜。ですがこの何とも言えない”胸のシコリ”というかは、この作品のエネルギー源として使い、晴

らしたいと思ってます。今後ともよろしくお願いします。